

第十一編 名所、旧蹟、人情、風俗

七八四

第一章 名所、旧蹟

第一節 雀の松原(涼松原)

一、所在地 雀の松原は魚崎町字上松原二八一番地、阪神電気鉄道線路の北側にある。

二、現状

面積二三歩、二基の石碑が、わずかにその名残りをとどめている。中央の碑の高さ六尺五寸幅三尺厚さ二尺四寸、基石は四尺に五尺の長方形で、碑面に「竹ならぬかけも雀のやどりとは、いつなりにけん松原の跡、中納言公尹卿」ときさまれ、右側の小石碑表面には「雀松原遺址、杖とめて千代の古塚とへよかし是や昔の雀松原、平安山田寿房」裏面には「地主松尾仁兵衛」ときさまれている。但し現在の地は真の旧蹟でなく本来の旧蹟はその西南に隣接して面積約五、六十坪、高さ最高部六尺位不定形田状の小丘で、中央に現存の自然石碑「竹ならぬかけも云々」が立つていたのであつたが、阪神電鉄開通に際し其軌道敷内に入り取壊されたので、松尾仁兵衛それを惜み自己所有地の現地を地盛りして石碑を移転し若松を植えて形態を整えたものである。昭和四年(一九二九)松尾家から魚崎町へ無償で譲渡された。

三、由来

今の住吉川以西の地は、雀の松原を中心として古く(九〇〇年頃)は「佐才郷」(新撰姓氏録)とよばれ、人家も多くあつたが、住吉川の大洪水によつて、この地の住民は川東に移り、今日の魚崎にまで発展した。大洪水の後の川西は松原となり、「佐才松原」といつたが、すでに正平六年(一一三二)頃「雀」の字をあてて「雀の松原」とよんでいた。魚崎町の旧家に佐々木、雀部などの姓があるのは、「佐々木山君」「雀部」(姓氏録)と何か関係があると思われる。それ故雀の松原はすずめの松原でなく、正しくはささいの松原とよむべきである。

「それは和名抄、郡郷部に摂津国菟原郡住吉郷に隣りて、佐才郷ありて、訓註欠たり。今思うにこは左々以とぞ訓(よむ)べき。さてその佐才郷は姓氏録摂津国の皇別に佐々木山君という姓あり。此の姓の人の代々住れし地にして、当時は正しく佐々木とぞ云けむ」「かくて其の佐才はも、雀松原の古名なるべくぞ思ゆる。そは此の雀の字はもと鶴鶴の借字にして、古事記に大雀命(おほささきのみこと)と記されしを日本書紀には大鶴鶴皇子(おほささきのみこと)と真字に書奉られたり。されど姓氏録にはまた古事記を例として猶雀部朝臣(ささきべのあそみ)と書れたるを後世音便に佐々以部(ささいべ)と訓るより、佐才に雀の字をも借り用ゐて書き来れりなるべし。されば此の雀松原は佐々以松原と訓べきなり。さて此の地点の佐才郷ならむには、かの住吉郷の如く、今も民家のあるべからむを、松原の跡のみなるはいかにぞやと思ふ人もあるべきか、是は余まだ幼き頃、此の里の老人の昔語に聞きこと、いささか耳の底に残りたり。抑此の五百崎の里なむ、昔の家居多くは今の住吉川の西の地なりしを、当時(そのかみ)武庫山より木いたく溢れ出て、家とも悉くおし流されつる事ありしより、皆今の地に移りて住居したりしとなむ。実や昔も今もかかる例は稀しからぬを、甚くも変りはてぬるかな、など幼き心に思ひし事のありつるを、今更にまた考ふるにいとよく符合たれば、昔は佐才郷なりしを、今の五百崎の地に移りし後はやうやうに荒れ行きて、唯松原のみ茂き野原となれるまにまに、人皆佐才松原とよびたりしを又既

七八五

に出来る如く、佐才に雀の字を借り用ひしより、其を又訓ひかめて須々売松原とは云ひ来れるにぞ有ける。」
〔雀松原考〕松尾綾平

「雀松原、五百崎の西にあり、一説に涼松原といふ。俱に由縁詳ならず」(撰津名所図会)「今の歌碑のある土地は、むかし雀神社の鎮座地であり(松尾家文書)又万福寺本堂の中心でもあつた、とつたえている(武庫郡誌)。尚口碑によると、この地は古の塚(古塚)跡であると、つたえられているが詳しいことは分らない。

四、源平盛衰記、平家物語に見える雀の松原

「源平盛衰記」卷一七に「千代に替らぬ翠は、雀の松原、みかげの松、雲居にさらす布引は、我が朝第二の滝とかや」と見え「長門本、平家物語」卷九には「福原といふ所は、北には神明跡をたれ、いく田、広田、西宮、千代にかはらぬみどりは雀の松原、みかげの松、雲井にさらす布引の滝、南をのぞめば、うみまん／＼たる、あはぢ島山、眼の前にさへぎる船」と記されているところをみると、雀の松原は古くから名勝としてきこえていたにちがいない。

五、大平記に見える雀の松原

この松原は正平六年(一一三五一)一月一七日足利尊氏、直義兄弟が互に戦つた古戦場である。「葉師寺次郎左衛門公義は、今度の戦如何さま大勢を恃みて、御方しそむしぬと思ければ、弥我事と気を励しけるにや、自余の勢に紛れしと、絹三幅を長さ五尺に縫合せて両方に赤き手を付たる旗をぞ指したりける。一族手勢二百余騎、雀之松原の木蔭に控えて、大手之軍今や始ると待つ処に、兼ての相図なれば、河津左衛門氏明、高橋中務英光、大旗一揆之勢六千余騎、畠山か陣へ推寄せ時を作る。畠山か兵雨り返りて、態と時の声をも合せす。此數影彼木影に立隠れて差攻引攻散々に射けるに、面に立つ寄手数百人、馬より倒に射されければ、後陣ひき足に成て進み得

す」(西源院本、大平記第二九卷、小清水合戦事)

六、雀の松原のうた(六〇首)

いつかまた、かくと知らまし五百崎の松に雀の来なく夕暮。

正三位 菅原信実

千代千代と、鳴けども鶴の声でなし、雀松原百になるまで。

貞松

あらし吹く松をあるじに幾秋か、佐才の里を月はとふらん。

(魚崎の人) 松尾綾平

千代よばふ田豆がねもがな五百崎の松原こめて霞むあしたは

小野利教

名ところを人に告とや松原に、やどる雀の声をあまたは。

中納言 公尹卿

竹ならぬかけも雀のやどりととは、いつなりにけん松原の跡。

「津の国雀の松原といふ所は、いつの代、いつれの人のいい名つけけんも知らねと、或人これにつきて歌をと有りしにより贈り侍る」

杖とめて千代の古塚とへよかし是や昔の雀松原。

(京都の人) 山田寿房

蟹小舟、ひく魚崎の浜風に、さそなすすしく雀松原。

(備後瀬津の人) 高田正方(蒙齋)

遠近の海山かけて朝夕に、なかめぞなほき魚崎の里。

同

なにしおはば、汝も言問へ村雀、宿りと聞し松原のあと。

(尾州の人) 源幸和母

雀てふそれもや鳥の跡たえぬ、言の葉そひて残る松原。

(魚崎の人) 山本良貴(拙齋)

これ行けば宿る雀は静まりて、草野の原に松虫ぞなく。

同

今も世に古き雀の名を残す、末野の原の松の一村。

同

ふりくるる時雨はよそに音すぎて、ただ一村そ松に残れる。

同